

僕たちがこの小屋にきて七日目の朝。  
マリーが外へ出てくると同時に、すべての作業が終わった。  
——道が、開いた。

「おはようございます」

「マリー、終わったよ」

「……はい、ありがとうございます」

開通した道を見つめたマリーは、意を決したように言う。

「私、魔女になります」

早朝の涼しい風が、僕たちの間をすり抜けていく。

「マリーなら、きっと良い魔女になる」

「本当にそう思いますか？」

「うん。僕が見てきたマリーなら、きっと」

「正直に言うと、不安がないわけではないんです。でも、  
スマレがそう言ってくれるなら……私、がんばります」

「ほどほどに、ね。マリーは頑張りすぎるところがあるから」

「はい」



「それじゃあ、僕はもう行くよ」

「待ってください！　せめて朝ごはんだけでも食べていきませんか？」

「いいや。やめておく」

「でも……」





「君と一緒にいたら、出ていく機会を逃しそうだから」  
「私はそれでも「本当は君が魔女になるところを見たくないんだ。ごめん」  
「……謝らないでください。スミレの境遇は知っていますし、わかりました」  
「マリー。今まで、ありがとう」  
「それは私の言葉です。スミレ。ありがとうございました」

彼女は困ったように眉を下げ、続けて言った。

「スミレは長生きなんですよ。もしもいつか、スミレの耳に届くほどの良い魔女になったら、私の絵を描いてくれないませんか？」

「え？」

「魔女の旅は何百年と続きます。その約束があれば、私は道を間違えずにいられると思うから」

「わかった。約束する。……この魔法も、役に立つんだな」

「スミレがいなかったら、道も開いてなかったですよ」

「うん……そっか」

「約束、絶対に忘れません」

「うん。じゃあ僕は画家としてがんばろうかな」

「スミレならきっと素敵な画家になりますよ」

「そう、かな」

「はい。きっと」

「じゃあ、君の噂を聞いたら会いに行くよ」







目の前の少女は美しく微笑んだ。

「楽しみにしています。またいつか、会いましょうね」  
「ああ。また、いつか」

そして、マリーに背を向けて歩き出す。  
行先はわからない。  
けれど、いつかの夢を追い求める日々が、僕を待っている。





「マリー様。ありがとうございました」  
「いいえ。お大事にしてくださいね」  
「噂に違わぬ良い魔女ですね」  
「そうあろうとしているだけです」  
「素晴らしい。魔法を扱う者は力に溺れることも多いと聞きますから」

魔女になった私は、雨を降らす魔法と傷を癒す魔法を授かった。  
その魔法を持って旅に出て、行く先々で人々の悩みを解決している。  
魔女になって何十年経っただろうか。  
スマレといった日々が、随分遠くの出来事のように感じる。

あの日。





スマレを見送ったあと、土山に刺さったシャベルを見つけた。

持ち手部分には血が滲んでいる。

見るだけで痛々しいそれは、しかし、彼にとってはなんでもないことなのだろう。

これがスマレの抱えている魔法。

私がスマレにできたことなど、本当はなにもなかったのではないかと思った。

シャベルを手に取り、スマレのいた部屋へ向かう。

「あ……」

部屋にはスマレの絵が散らばっていた。

ひとつひとつ拾い上げていると、無性に泣きたい気持ちになって。

「やっぱりスマレの絵は素敵ですね」

本人に届かない言葉は、部屋に消えていく。

彼が親友を描いたように、いつか、彼が描きたいと思える魔女になりたい。

魔女になれば、スマレの魔法を解くこともできるかもしれない。

また会えたら、そのときは――。

前を向く。

約束のため。





自分のために。

良い魔女でいられるように、歩き続けよう。

ED1 【それぞれの描く道】

